

悩ましき〈の〉

——言語時評・十九——

工藤力男

ラジオ『ハングル講座』のテキストの入門編、二千五年五月号の十七日条から、わたしが違和感を覚えた例文をひく。講師は日本語が極めて巧みな韓国人である。

なぜあさってから水曜日まで会社を休みますか。

この文末は「休むのですか」とするのが自然だ、とわたしの母語感覚はいう。外国人が日本語を学習するうえで最も難しい文法項目は助詞「が」と「は」の使いわけだといわれる。これは、日本語教育に携わる多くの人が認めるに違いない。それに優るとも劣らないのが、右に見た「の」ではあるまいか。

井上ひさし『私家版日本語文法』（新潮社 1981）に、自

身の孤児院時代、窓ガラスをわつては叱られた話がかいてある。カナダ人修道士の詰問は、きまって「だれがガラスを割りましたか」であった。井上さんはそれを〈外国人式日本語〉という。一方、日本人修道士の詰問は「誰がガラスを割ったのですか」であったとして、こう説明する。

ガラスが割れているとは、すでに旧情報に属する。その旧情報を基に新情報を得ようとするには「……のですか」という「のだ文」を使わねばならない。（p.233）
そのとおりである。このしくみを換言すると、ある事態の背景すなわち原因や理由などを問うたり述べたりする文の述語には、「の」を含む「のだ／のです／のか／の」を用

いる、となる。「どうしたのだ？」「頭が痛いのです」「どこか痛いのか」「足が痛いの」という会話が成りたつゆえんである。右の日本人修道士の文では、主述を入れかえた「ガラスを割ったのは誰ですか」がいつそう日本語らしいこと、いうまでもない。

同講座八月号の三十一日条からも一つ。

誰が電話番号を知っているのか教えてください。

こちらは、なんの前提もなしに発せられた文なので、のを含まない「誰が知っているか」が自然な日本語の文だということになる。

日本語の機微に関わるかくも重要な「ん」で実現することもある）であるが、初級の日本語教室ではこれを教えることに余り熱心でなかったという。菊池康人「受難の「んです」を救えるか」(『言語』2006.12)は、そのあたりの事情について鋭い。

本稿では引用符にかえて傍線を用い、言及箇所にもそれを附することが多い。

右に言及したのは、先行する文相当の表現を名詞節にまとめる語として日本語史上に登場した。例えば、伊勢物語

第八段の「あさまのたけにけぶりのたつをみて」は、「浅間の嶽に煙が立つのを見て」などと口語訳するのが普通である。こののは、体言に準ずる助詞として〔準体助詞〕と名づけられ、今は〔形式名詞〕ともよばれ、別のたちばの文法では〔補文標識〕という。この語法がうまれたのは江戸時代の初め、広く使われるようになったのは十七世紀後半からである。これは、複文において論理関係を明示する接続助詞「ので」「のに」も生んだ、日本語史上の優れものである。

同類の形式名詞「こと」があるのに、あえて新しい語を求めたのは、日本人がその必要を感じたからで、のとことの使いわけによって日本語の明晰性が進んだ。「梅の実が落ちるのをみた」「鶯が鳴くのをきいた」に見るように、のは同時性・同一場面性、換言すると〔密接性〕の表現を典型とし、動詞は知覚動詞をとる。他方、ことは、祈願・命令・要求などの表現を典型とし、「育つことを祈った」「去ることを求めた」などという。こちらの「ことを」は「ように」ともいえる。かくて、のは具体的な表現を担い、ことは抽象的・一般的な表現を担うことになった。

だが、境界域が広く、両方を用いる語も多くて議論が尽

きず、人によって規準が違ふことになる。さらに、場面の公私、文章の硬軟などで異なり、文脈や共起する語との関係でも変わるので、いよいよ複雑である。

わたしがこの問題を深く考える契機になったのは十年前、平凡社ライブラリーの『古典の影』(1988)を読んだときであった。そこで、ゼミナールの学生十人の反応を調べてみた。三十箇所を空欄で呈示し、そこを満たすのはのかとか、その根拠は何か、と問うたのである。密接性のできことが殆どない評論文である。

初めに、一対十一と分かれた三箇所を掲げる。

それがまず一つの作品である□を忘れてはなるまい。

アカデミズムの強さと批評の弱さとが相関関係にある

□は確かで、

文学に歴史的次元が存し、それが一つの特殊な歴史を
なしている□は疑えない。

右の空白箇所、著者はのを、わたしどもはことを用いたのである。

反対に、著者を含む全員が一致した二箇所をあげる。一致したわけは言うまでもなからう。

テキストは作品として読まれることで初めて文学として実現されるのだ。

資料の乏しいのをいいことに想像を逞しくするならば、

同じ著者の『梁塵秘抄』(日本詩人選22 筑摩書房 1976)

でも、使用状況は同様であった。そのうちの二文をひく。

梁塵秘抄がこうした新語を自在に使いこなしているのに注目したい。(p.34)

和名抄が遊女を乞盗類に入れているのでも分るように、それが卑賤のものであったのはもとよりである。

(p.8)

著者は「イトホシは痛ハシの転で、心痛むのをいう。」(p.8)のようにも用いる。

の、この使い方が、わたしどもと大きく違った原因は何だろうか。大正五年生まれの著者とわたしとの年齢差は廿二、わたしと学生とは三十数歳の差、言語習得の時代より成育環境、つまり個人差によるとしか考えられない。

各種の文章から名文をえりすぐったという本がある(文春文庫『忘れられた名文たち』1997)。その中に、「種々の工夫を見るためにやや省略してあるのをおことわりしておき

たい」(p.297) という断り書きがみえる。わたしならことを使うところである。名文選びの達人を自認する人をも迷わせるようだ。

このようにわたしが違和感を覚えた多くの実例から、朝日新聞の三つを示そう。初めは日本企業への就職を望む中国人学生の選抜を扱った記事。

人事担当の中村任志氏は「本物かどうか見極めるのが大事だ」。(2003.2.23)

ついで、米国の新しい財務長官がG7にデビューして塩川財務大臣と対面した記事。

一方で、「日本の成長が重要」とクギを刺すのも忘れなかった。(同)

最後に、秋田県の児童連続殺害事件の初公判までの期間が長かったことについて。

弁護士が2人しかいなかったのが原因のようだ。

(2008.3.16)

わたしの語感はいずれもことを求めるのだが、その根拠を簡潔に説明することは難しい。

放送の表現にも同じことを感ずる。収穫期の果物などの盗難事件の報道で、「盗まれているの」が見つけられました」

をよく耳にする。四月十七日朝のラジオでも、栃木市の日本刀盗難について全く同じ表現をした。これを聞くと、つい、盗まれた物が見つかった、と錯覚してしまうが、盗まれたという事実^{じじつ}に気づいたにすぎない。

かかる表現に頻繁に接するのは、両語の機能差が小さくなっているからではないか。そう思つて朝日新聞のデータベース『聞蔵Ⅱ』^{きんざう}で調べると、確かにその傾向はあるが、承接する語によっても異なり、簡単に数値化することは難しい。

近年、いわゆるハウツー物の出版が盛んである。それらの書物は、内容を一目で知らせんがため、直截簡明に問いかける型の書名が多い。そこで夕刊読賣新聞は、「なぜ多い?」「なぜ」と問う本」と題して「トレンド館」のページを構成した(2006.3.1)。

その書名をみると、『さおだけ屋やなぜ潰れないのか』から『日本人はなぜ狐を信仰するのか』まで十四点、概して書名が長い。現代日本語ではなぜに应じてのかで結ぶのが普通である中で、例外は関川夏央『おじさんはなぜ時代小説が好きか』だけである。この題を初めてみたとき、わ

たしは藤森成吉『何が彼女をそうさせたか』（1927）を思
いだした。

近年刊行された本でのかとしないのは、ほかに『なぜ、
いま代用監獄か』『憲法九条はなぜ制定されたか』『女は男
のそれをなぜセクハラと呼ぶか』などがあるが、これは少
数派である。その著者の狙いは知らないが、たとい一二字
であっても、標題が長くなることを厭うたのではないか。
のを含まないほうが締まるし、古風な感じも漂う。

見出しの文字を大きくして字数を減らしたい新聞もこの
手を使う。朝日新聞の「もつと知りたい！」欄（2007.7.1）
で、本文のリードを「再び、トキが野生に戻ることはでき
るのか。」と結ぶのに、見出しは「トキ、野生に戻るれ
か？」としたのもそれだろう。

このように、のの存在意義が著しく減少しているようだ。
ニュースの放送では、初めに主な項目をつける際と本文と
で異なることがある。韓国の大統領選挙にからむ李明博候
補の疑惑について、盧武鉉大統領が指揮権発動を法相に指
示したとき、讀賣新聞は「選挙情勢にどう影響するかは不
透明だ」（2007.12.17）と書いた。当日のラジオ第一放送の
六時四十分、主な項目では「どのような影響を与えるのか、

注目されます」、本文では「与えるか」であった。「焦点は
整理再生機構が差押えの手続きに入るのかどうかに移りま
す」に対して、「入るかどうか」もあった（2007.6.18 十九
時）。

二つの事態の生起する確率が中立的な表現では、「伸る
か反るか」「食うか食われるか」「生きるか死ぬか」など、
のを伴わないのが日本語の伝統であった。それが、右に見
たように変わってきているのである。日本銀行新総裁の武
藤候補を野党の反対で参議院が不同意としたとき、ラジオ
は「同じ候補者を再提示するのか、差しかえるのか」と報
じた（2008.3.11）。

テレビジョンでは、それが音声と字幕のゆれとなること
がある。総合テレビ『生活笑百科』の一例だけをあげると、
司会者の「再婚は無効になるか」に対して、字幕は「無効
になるのか」（2007.9.10）であるというように。いずれもの
の有無に頓着しないようだ。

夏目漱石『吾輩は猫である』の冒頭、「吾輩は猫である。
名前はまだ無い。」の続きを、わたしは「どこで生まれた
か、頓と見当がつかぬ。」と覚えていた。山口仲美『犬は
「びよ」と鳴いていた』（光文社新書 2002）には「どこで生

まれたのか」とある (p.11)。無意識にいられたのを、原典と照合した編集者が見のがしたのだろう。

有意性を失ったのが報道に限られるわけではなく、専門家の論文にも多い。日本文学と言語学の一例ずつをあげる。

現実の政治が勅撰集にどのように映し出されているのか、それらのことはいまだ十分に論じられていないと思われる。／本稿においては、現実の政治のあり方が勅撰集にどのように映しだされているかを、『國語國文』2006.3 p.1)

例えば「深い水深を持っている」ことがどのような機能を果たしているのか、「ユーモアを持っている」ことがどのような影響を与えているかなど、当該の文脈において最も特立した情報が認識される。(『言語』第三十二巻十一号 p.59)

このように変質しているらしい「の」は、さまざまな新しい現象を生みだす。ここには専門家の文章で誤読を誘われた例をあげよう。

ドイツ文献学のこのような方法が、じつはわが国近世期の国学の方法ときわめて類似していたのに、あらた

めて芳賀は気づいていく。『國語と國文學』2003.11

p.36)

わらはべ

「このごろ童の口の端にかけたる怪しの今様歌」と前

引狭衣物語にあるのに、あらためて目をとめる必要がある。(上引『梁塵秘抄』p.87)

のにの下の読点でわたしの読みは休止してしまった。接続助詞と判断したのである。続く文字列が視野に入って修正しえたが、ここで改行されていたら完全に誤読しただろう。危うい書き方である。のならぬことであつたら、迷うことがなかったものである。

かかる時代なので、無意識に用いたらしいの、意味の把握しがたいのも多い。本の広告が書店や広告会社を作るものだろうが、著作者が全く関与しないわけでもあるまい。『意味論の対象と方法』の広告には次のようにある。

人間の生得性と認知能力・言語能力の間にはどのような関係があるだろうか。ことばと社会の間にはどんな緊張関係があるのであろうか。(大修館書店『言語』2003.1)

外国人に対する日本語教育を専門とする学校が発行した

『日本語の助詞二種』という本の最新の広告には、大きな活字で次のように書いてある。

「は」と「が」の違いを／外国人に対する日本語教育の現場ではどのように教えているのか（『言語』2008.6）

末尾の「の」は、わたしには不要なものに思われる。
さらに理解したい広告がある。例えば大沢在昌『ニッポン泥棒』。書名の右にある「未来を握られた男。64歳、無職。まもるのか。逃げるのか。」（朝日新聞 2007.2.25）がわからない。書名の左にも六行あって、「尾津は、自分の、そして世界の未来を守ることができるのか？」と結んでいる。それなら「まもる」と「守ることができる」が等価ということになる。

無意味なのと考える数例を朝日新聞からひく。まず、BSE問題をめぐる社説から。

米国のBSE対策は、日本だけでなく、EU（欧州連合）と比べても甘い。検査数をふやしたとはいえ、全体の1%弱が対象になっているのにすぎない。

（2004.6.27）

東大和市の特養さくら苑でおこった、高齢者への性的虐待に対する職員の処分について。

男性職員2人は当初、出勤停止5～7日間。「1週間の処分で復帰されて介護されたいと思うのか」と家族が失望した。（2006.8.13）

最後に「世界の論調」から。

クリントン氏がどこまで跳ね返すのか。内輪の戦いほどの程度、11月の本選挙での民主党のチャンスを損ねるのか。今後の見どころである。（2008.2.10）

極めつけは二つ。一つは、読書欄で富山太佳夫『笑う大英帝国』を百三十五字で紹介した文章の末尾、「そこにこそ英国の笑いの文化があるのらしい。」（2006.5.28）。いま一つは、若年層に鉄鋼業を宣伝すべく日本鉄鋼連盟が作ったという型破りの広告で、ヘビーメタルの人気ギタリストが「メタルはいけるのか？」と訴えているものである（2006.10.29）。ともにわたしの理解を超えている。過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし、と思う。

三百万部を売ったと豪語する本の新聞広告を何回か目にした。その『人はなぜ生まれいかに生きるのか』は、過去を向いて原因を問う「なぜ生まれたのか」と、未来に向かって方法を問う「いかに生きべきか」を一緒にした、無神経な書名というほかはない。

以上、形式名詞「の」をめぐる諸現象について考えた。
これは何を意味するのだろうか。

「こと」から「の」への移行には聴覚印象の関与が考えられる。コトは二拍とも破裂音、特にコが硬い。ノは柔らかな鼻音である。軟らかさを好む近年の風潮がのへの移行を促しているという解釈である。あるいは、スポーツ選手の談話「あそこは勝負だったかな」というのはありますね」に見るように、疑問語を附し、反省とか後悔とか明言しない、醜化表現の流行と関係があるのかもしれない。「べき」の衰退も関与していそうだとまれ、日本語の進む方向を考える手がかかりになりそうに思う。

ラジオ第二放送の講座「『カナ』手本ドイツ語」に、何についての質問かを三者択一で答えさせる“Ohren spizen”（耳を澄ませて）がある。五月十四日条の第三問の選択肢は、テキストに「レストランにライスがあるか」「ドイツに米があるか」「米を売っているか」とあるが、放送ではすべて「ゝのか」と読まれた。講師は日本人である。

（二千八年夏）